明恵上人の研究

野呂靖

目次

序論
本論
第一章　明恵の生涯と著作
第一節　生涯
第二節　著作
第二章　明恵における華厳思想の形成
第一節　李通玄における仏光三昧観
第一項　華厳教学における成仏論の特色
第二項　李通玄の仏光三昧観の検討
第二節　李通玄・澄観における三聖円融思想
第一項　李通玄の三聖円融思想の検討
第二項　澄観『三聖円融観門』の検討
第三章　仏光三昧観の形成過程
第一節　初中期の実践行
第二節　李通玄の論書をめぐる問題
第四章　仏光三昧観の受容と展開
第一節　『華厳修禅観照入解脱門義』の検討
第二節　三聖円融思想の受容と展開
第一項　『摧邪輪』における『華厳論節要』の引用
第二項　『華厳修禅観照入解脱門義』における三聖説
第三項　『華厳仏光三昧観秘宝蔵』における五聖円融説
結論

序論

明恵上人高弁（一一七三～一二三二、以下、明恵）は、華厳宗中興の祖として、いわゆる鎌倉旧仏教を代表する僧の一人である。明恵の華厳思想は、夙に実践性の強いことで知られ、高山寺系華厳とも称されてきた。なかでも、このような評価を決定づけるに至った実践に、明恵晩年に行われた仏光三昧観（以下、仏光観）がある。

仏光観とは、唐代の李通玄（六三五～七三〇）によってまとめられた、毘盧遮那仏の光明を観想するという観法であるが、明恵はこの仏光観を、『入解脱門義』において、華厳教学の円融思想の一つである三聖円融思想を用いて解釈した。さらに『秘宝蔵』においては、これを三聖円融から五聖円融へと展開させており、日本華厳宗における独創性が認められる。

従来、かかる明恵の仏光観と三聖円融思想が、いかなる影響によって形成されたかという点は、少しく問題とされてきた。すなわち、李通玄の影響が大きいといわれる一方で、近年、法蔵（六四三～七一二）や澄観（七三八～八三九）といったいわゆる伝統的な教学をも重視しているという指摘がなされている。[1] 実際に検討してみると、確かに法蔵や澄観などの教学と李通玄の所説とを会通する面があるものの、李通玄一師からの影響は極めて大きいと考えられる。

また、明恵が仏光観を受容した経緯を再検討すると、従来把握されていたより早い段階で、李通玄の思想を受容していたと考えられる。

本研究では、この仏光観と、その理論的根拠となった三聖円融思想が、明恵において如何なる要因により受容され、展開していったのかという点の検討を意図した。

本論

一

明恵の仏光観および三聖円融思想の理解を検討する前段階として、まず中国華厳宗諸師の思想を把握しなければならない。注目したいのは、明恵が仏光観の意義を「初発心時便成正覚即自開解不二由レ他悟一。即此観所得也②」として、『華厳経』に説かれる「初発心時便成正覚」に求めている点である。この初発心時の成仏は、華厳教学において、菩薩の行位のうち十信位が満ちた段階、すなわち十住位の初発心住における成仏を主張する成仏論として最も重視される。法蔵は、これを「十玄縁起」のうち「諸法相即自在門」に位置付け、十信位を得た時点で他の行位がすべて統収されるという信満成仏を主張した。一方、李通玄は、『華厳経』に説かれる毘盧遮那仏の光明は実践の階梯を表しているとみる独自な『華厳経』理解のもとに、仏の光明に即して、十信位が満じた初発心住における成仏が可能になるとする理解をおこなっている。そして、そのためには毘盧遮那仏の放つ光明、特に『華厳経』「光明覚品」に説かれる十信位を象徴する光明を順次に観想していくという実践が重視された。このように、李通玄は仏光観を行うことで初発心時の成仏が可能となるという、法蔵の理解に対して実践的といえる解釈を行ったと考えられる。ところで、李通玄はまた、『華厳経』に説かれる内容は「入法界品」中の文殊と普賢の二菩薩と毘盧遮那仏との円融によって表れている、とする理解をしている。このような三聖円融は、具体的には「文殊為二法界理一。普賢為二法界智一。理智妙用為二一仏門一。以二此一門一為レ化二群蒙一分為二二法③一。」とするように、文殊に理を、普賢に智を配して、これが合したところが仏であり、これによって一切衆生を教化するという。また、この李通玄の三聖円融思想は、澄観によって観法として組織化された。『三聖円融観門』には、三聖が円融の関係にあることを観想することで行者の心と境が無二となって、常に三聖と見えることが可能となるとする。この点は李通玄の三聖理解を具体化したといえるが、三聖に配当される法については、澄観は文殊に智を、普賢に理を配するなど相違点もみられた。

二

次に、明恵が仏光観を実践するに至った背景について検討を行った。従来、明恵と仏光観との関係は、『冥感伝』に自ら、承久二年に李通玄の論書を閲覧したことが実践の契機である、と述べる箇所が初見であるとされている。しかし、明恵が李通玄の思想に注目し

たのは、より早い段階であったと考えられる。すなわち、建暦二年撰述の『摧邪輪』に引用された諸経論を調査すると、既に李通玄『新華厳経論』を簡略化した知訥『華厳論節要』の依用が認められた。④注意したいのは、明恵はこれを用いて、既に三聖の円融を以て菩提心を把握していることである。また従来『入解脱門義』の特色とされてきた「論家」と「宗家」による華厳宗諸師の理解が、ここでは既に用いられている。明恵が『入解脱門義』において用いた李通玄『華厳経合論』も建保三年（一二一五）以前には入手可能であったとの指摘⑤を合わせて考慮すれば、ここに仏光観受容の素地を認めることができると考えられる。また、『明恵上人行状』には建保三年の記事として、明恵が禅定中に度々光明を放つという奇瑞が記されている。⑥『入解脱門義』には、行者が光明を放つ事は仏光観実践上の重要な証明と捉えられており、⑦この時点における仏光観の実践を推測させる。このように、明恵の仏光観の形成過程には、建暦二年以降、すなわち李通玄の思想の受容以後が極めて重要な転機であったと考えられるのである。⑥

三

以上の点を踏まえ、次に、実際に明恵の仏光観に関する著作を通して、如何なる諸師の説に基づき理論を形成しているか検討を行った。明恵は『入解脱門義』において、仏光観を解釈するにあたって法蔵や澄観の解釈は理論面では勝れているが実践面において充分ではないため、「専以二彼釈（李通玄＝筆者注）一可レ為二依憑一」⑧との態度を表明している。一方、『入解脱門義』には法蔵と李通玄の解釈を並列して述べている箇所もある。例えば、一位が一切位を得ることを成り立たしめる根拠として法蔵『華厳五教章』「所詮差別」（「行位差別」）の円融門と行布門による信満成仏の解釈をまず引用する。次に李通玄の解釈を、「今広論等意於二信位中一起二文殊大心一。信二不動智仏等即是我心自性一。於二地前三賢初発心住中一即能頓証二仏果法門一。其後次位行相皆同。」と、要約して並列し、その後「此論宗取二彼二門中果分別教義一一向為二経宗旨一也」として会通している。⑨「二門中の果分」とは、「所詮差別」において、三乗教に寄同して因分を説く行布門に対して、別教一乗の果分を説く円融門のことを指すから、李通玄のかかる理解は、法蔵の立てる円融門に相当すると述べていることになる。しかし注意したいのは、そのすぐ後段において「入証修行玄妙良応如レ此故也。」としており、つまり、円融門に相当するという李通玄の十信位の理解を「入証修行玄妙」として採用しているのである。このように、十信位の理解についても、一見並列して述べているようであるが、最終的には李通玄の理解に依っているといえよう。

また、『入解脱門義』では、仏光観の実践の過程が文殊・普賢と毘盧遮那仏の関係によって理解されている。すなわち、三聖の円融した境地が初発心住にあたり「初発心時便成正覚」が成ずるという。ところが承久三年の『秘宝蔵』では五聖（文殊・普賢・観音・弥勒・

毘盧遮那）による円融によって把握されている。李通玄にはこのような解釈はみることができないため、明恵の独自な点と認められるが、その根拠は明確に示されない。

結　論

明恵は、行位の相即に関する理解については、法蔵と李通玄の説を並列に扱ってはいるものの、光明についての理解や仏光観の受容に関しては、ほぼ忠実に李通玄の所説を継承していた。三聖円融思想については、李通玄の理解と、それを観門として組織した澄観との理解では、若干の相違があった。この点は、明恵において特に明確に示されないが、澄観の説との会通を目指す一方、李通玄からの影響は多大なものであったと考えられる。一方、仏光観を実践するに至った背景として、建暦二年の『摧邪輪』が李通玄の論書を間接的に依用していることは、上述のように李通玄が明恵晩年の華厳思想に決定的な影響を与えていることを考慮すれば、思想形成上の重要な転機であったと考えられる。今後は、『摧邪輪』における三聖理解や、五聖への展開の意図が検討課題である。⑩

注

① 木村清孝「明恵における「信」の思想の一特質―金沢文庫本『華厳信種義聞集記』を援用して―」（『金沢文庫研究』二〇・一〇、一九七四）等。

② 『秘宝蔵』上巻（日蔵七四、九三上）

③ 大正三六、八七六中

④ 『鎌倉旧仏教』日本思想体系、三二五上・下

⑤ 柴崎照和「明恵と仏光三昧観（一）―実践観から見たその受容の理由及び背景」（『南都仏教』六五、一九九一）参照。

⑥ 明恵上人資料一、東京大学出版会、五一下

⑦ 「解脱禅師発二仏智於即座一。通玄居士放二白光於肉身一。専依二此観力一也」（日蔵七四、四一下）

⑧ 日蔵七四、六八下

⑨ 日蔵七四、四六上

⑩ この他に、この様な禅観や密教を重視する思想形成の基盤となった明恵の華厳学理解を把握する必要がある。明恵には約二〇点の著作が現存するが、その大半がいわゆる「行」に関する著作であり、教相面に関する注釈的な著述は、わずかに『華厳唯心義』二巻、及び『金師子章光顕鈔』二巻のみとなっている。しかし明恵が教相面の理解を重視していなかったといえば決してそうではなく、晩年に至るまで『華厳五教章』『大乗起信論義記』『華厳経疏』などについて数多くの書写や門下への講説を行っている点が注目される。明恵による講説の「聞書」については、約二十点が知られているが、特に、いわば華厳学の綱要書ともいえる法蔵撰『華厳五教章』に関する「聞書」として、『五教章上巻聞書』二巻（高山寺蔵、高野山宝亀院蔵、東大寺図書館蔵）、『華厳五教章略文義』二巻（金沢文庫蔵）順高編『五教章類集記』三十巻（存十三巻）（東大寺図書館蔵）などが存在する。これらは従来注目されることのすくなかったものであるが、伝統的な華厳学典籍に対する注釈書を残していない明恵にあって、その教判論や成仏論など、華厳学理解を見る上で極めて貴重な資料であると考えられる。これらの資料には、いわゆる東大寺系華厳学との相違に言及しているなど、興味深い記述が窺え、今後の検討課題としたい。